



Title	イエズス会ローマ文書館所蔵 慶長九年九月二十七日付ローマ字書簡の日本語表記
Author(s)	川口, 敦子
Citation	長崎大学教育学部紀要. 人文科学. 2007, 73, p. 1-7
Issue Date	2007-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10069/9720
Right	

This document is downloaded at: 2018-12-17T00:33:09Z

イエズス会ローマ文書館所蔵 慶長九年九月二十七日付 ローマ字書簡の日本語表記

川 口 敦 子⁽¹⁾

The Roman Alphabet Notations of Japanese in the Letter,
Keichō 9. 9. 27. (1604. 11. 18.) (ARSI Jap. Sin. 33, 76r-77v)

Atsuko KAWAGUCHI

1. はじめに

2006年9月、イエズス会ローマ文書館（在イタリア、ローマ）においてキリシタン関係の手稿資料を調査する機会を得た。本稿では、今回調査した資料のうち、日本・中国関係文書集第33集（Jap. Sin. 33）の76r-77vに収録されている、慶長九年九月二十七日付のローマ字書き日本語書簡について報告する。

本資料Jap. Sin. 33, 76r-77vは、尾原悟氏が『キリシタン文庫 イエズス会日本関係文書』⁽²⁾において、「1604年10月18日」付の「日本のセミナリオの聖母会の生徒から総長宛の書簡」と報告しているもので、そこではJap. Sin. 33, 70-71vと報告されている。筆者が2000年にイエズス会ローマ文書館で閲覧した際には、本資料に「70-71v」の丁付けがあったことを確認しているが、その後Jap. Sin. 33は再整理され、丁付けも改められた。旧70r-71vは、改められた現在の丁付けでは76r-77vに相当する。資料は数葉ずつ紙製保存ケースに入れられた状態で保管されている。

2. 資料の概要

本資料は一枚の紙葉を二つ折りにしたもので、左開きの表側から76r、内側が76v, 77r、裏側が77vとなっている。紙葉の大きさは、二つ折りの状態で縦35.9センチ×横26.0センチである。

76rは書簡本文である。

76vと77rには何も記されていない。

77vには「Exemplar literarum inferioris Congregat^{is} / B. V. Annunciatae Seminarij Ja / ponici, quas scribit ad R. P. / Claudium aquauiuá Prepositū / Generalem Societatis JESV.」（日本のセミナリオのお告げの聖処女〔聖母マリア〕のコングレガシオの下位者による、イエズス会総長クラウディオ・アクアヴィヴァ尊師へ書いた書簡の例）と、ラテン語で本資料の簡単な説明が記されている。

(1) 国際文化講座（国語）

(2) 尾原悟編『キリシタン文庫 イエズス会日本関係文書』（南窓社1981）p.171。

3. 翻刻と翻字

以下は、慶長九年九月二十七日（グレゴリオ暦1604年11月18日）付、日本のセミナリオの聖母会による日本語書簡の翻刻およびその翻字である。なお、本語については、国字本の本語表記とその原則を参考に翻字した。

《翻刻》

76r-01 Fayjõ Geral sonrõ.

02 Tçuxxinde gonjõ itaxi soro. Yotte qionenno faru cono chi no Seminarioni voite Con=
 03 gregação ayfajmari, fanyei iyamaxini soro. Macotoni tenxuno von megumi vatacuxi=
 04 narazutoua mõxi nagara, fitoyeni sonrõno gocõuon cataijqenaqu zongi tatematçuri so=
 05 ro. Soreni tçuqi cono ninju ichibunno maijuari xomõno fitobito tatanni soreto iyedo=
 06 mo, catçúua iacunen, catçúua taniñju yuye dôzano xuguiõ canay gataqini yotte, co=
 07 rerano fitono tameni vonouono dancóuomotte nibanno xuye cõquiõ xerare soro. Xicare=
 08 ba cono cuuatate qimeini aycanóni voiteua, Romano Congregaçõni mexi cuuaye=
 09 rare, vonajiqu Indulgençiano gomençio tóno gofaibunni azzucari soro yõni, goqiojõuo na=
 10 xi cudasaru beqi coto ijta motte manzocu coreni sugu becarazu soro. Cono mune sonyuo
 11 vbequ soro. Xeiquõ xeiqiõ vyamatte mõsu. Goxuxxe irai xen roppiacu yonen.
 12 Queõchõ cunen. Cuguat nijú xichinit.

《翻字》

拝上ゼラル⁽¹⁾尊老。／

謹んで言上致し候。よって去年の春この地のセミナリオに於いてコン／ゲレガサン⁽²⁾相始
 まり、繁栄弥増しに候。誠に天主の御恵み私／ならずとは申しながら、偏に尊老の御高恩
 忝なく存知奉り／候。それに就きこの人数一分の交はり所望の人々たたんに それといへ
 ども、かつうは若年、かつうは多人数故 同座の修行叶ひがたきによって、こ／れらの
 人の為に各々談合を以て二番の衆へ講教せられ候。然れ／ばこの企て貴命に相叶ふに於い
 ては、ラウマのコングレガサンに召し加へ／られ、同じくインヅルゼンシヤ⁽³⁾の御免許等の
 御配分に預かり候やうに、御拳状をな／し下さるべきこと自他以て満足これに過ぐべから
 ず候。この旨尊意を／得べく候。誠惶誠恐敬って申す。御出世以来千六百四年。／慶長九
 年。九月二十七日。』

4. 内 容

4.1. 宛先と差出人

本資料は書簡の体裁をとってはいるが、具体的な宛名も差出人名も書かれていない。イエズス会ローマ文書館Jap. Sin. に収録されている他の書簡を見ると、ポルトガル語で書かれた書簡はもちろん、同じローマ字書き日本語の書簡、例えばダミアン修道士の書簡（Jap. Sin.

(1)「修道会長」の意。

(2) コングレガシオ（コングレガチオ）。「信心会」のこと。

(4)「贖宥、贖宥符」の意。

5, 177r-178v)⁽¹⁾、レオナルド修道士の書簡 (Jap. Sin. 34, 178r-179v)、セバスティアン木村の書簡 (Jap. Sin. 34, 180r-181v)、ゴンサル修道士・ペドロ修道士・アントニオ修道士・ミゲル修道士の書簡 (Jap. Sin. 34, 188r-188v) でも、必ず末尾に差出人の署名がある。本資料のように、宛名はともかく、差出人の署名がないというのは、書簡としては奇妙である。

また、他の書簡は紙葉全体にびっしりと細かい文字で書かれているものがほとんどで、上下左右の余白はほとんどなく、行間も狭い。しかもその字は細かく、筆記体に近い実用的な文字で書かれており、判読が困難なこともしばしばである。それに対して、本資料は紙葉の上下左右に大きな余白があり、行間も広めである。文字も非常に丁寧に書かれており、明瞭に判読できる。

以上のことから、本資料は書簡の原本ではなく、写しではないかと考えられる。

ところで、本資料には宛先が具体的には書かれてはいないが、これは容易に推定できる。冒頭の「ゼラル (Geral)」はポルトガル語で「修道会長」の意味であり、ここではもちろんイエズス会の総長を指す。慶長9年 (1604年) 当時のイエズス会総長はクラウディオ・アクアヴィヴァ (1543-1615: 総長1581-1615) であり、77vの説明書きにもある通り、クラウディオ・アクアヴィヴァに宛てられたものであることが分かる。

一方、差出人は、内容から「去年の春この地のセミナリヨに於いて」始まった「コングレガサン」の関係者であることが推定できる。「去年の春この地のセミナリヨに於いてコングレガサン相始まり」(76r-02-03) とは、1603年に有馬のセミナリヨで「お告げの聖母のコングレガシオ」が始まったことを指している。

有馬のセミナリヨでお告げの聖母のコングレガシオが始まったいきさつは、以下の通りである。

一六〇三年、セミナリヨが有馬に移された時、ヨーロッパから着いたばかりの数人の宣教師もそこで日本語を勉強しに行った。その中にはスピノラ神父とデ・アンジェリス神父の姿も見られた。彼等はヴァリニャーノの指導の下でカルデロン院長の全面的な協力を得て、セミナリヨで『お告げの聖母の組』(コングレガシオ) を設立した。これはアクアヴィヴァ総長の依頼によるもので、ヴァリニャーノ神父がマカオに帰る前に同宿とセミナリヨの生徒たちにその精神と会則を説明した。巡察師が出発した後、副管区長パシオ神父は有馬へ行き、最初の十名のメンバーを入会させた。他の同宿たちも次第に聖母の組に入り、入会前に皆聖イグナチオの霊操に基づいて数日間黙想した。〔中略〕

一六〇四年、経済的な危機を乗り越えて、セミナリヨが手順よく活動を続けた。〔中略〕お告げのコングレガシオは非常に繁栄していて、会員はすでに五十名位に達していた。その中に有馬地方の教会で活動していた数人の同宿も数えられた。三月二十五日、お告げの祝日でもう一つのコングレガシオが始まった。これは第一のコングレガシオのための準備のようであった。⁽²⁾

当時のコングレガシオの状況について、本資料に「かつうは若年、かつうは多人数故同座の修行叶ひがたき」(76r-06) とあることから、1603年に始まったお告げの聖母のコン

(1) 拙稿「イエズス会ローマ文書館所蔵1564年5月24日付ダミアン修道士による日本語書簡について」『国語と教育』〔長崎大学〕29号 (2004年11月) 参照。

(2) 結城了悟「有馬のセミナリヨ 一五九五—一六一四年」『キリシタン研究』第二十一輯 (吉川弘文館1981)。

グレガシオは入会希望者が非常に多く、また未熟な入会希望者と一緒に活動するのも難しく、一つのコングレガシオだけでは活動が困難な状態だったことが分かる。1604年3月25日に「もう一つのコングレガシオ」が始まったのは、こうしたいきさつからであったのだ。「二番の衆」(76r-07)とは、この新しいコングレガシオの会員を指していると考えられる。

以上のことから、差出人は有馬セミナリヨの「お告げの聖母のコングレガシオ」の関係者だということが分かる。

4.2. 書簡用語

本資料には、「拝上ゼラル尊老」(76r-01)「誠惶誠恐敬って申す」(76r-11)など、日本の書簡特有の用語が用いられている。これら書簡用語の使用方法については、ロドリゲス『日本大文典』(1604刊)⁽¹⁾に詳しい。以下の記述から、「拝上」および「尊老」がアクアヴィヴァ総長への書簡に用いるのに相応しい用語であることがわかる。

○ Fajjō (拝上)、Faitei (拝呈)、Faifucu (拝覆) は普通に宗教家に対して使われる。

(『日本大文典』第三卷「Xinjō (進上) 等の助辞に就いて」訳本p.710)

○ ‘充所’ (Atedocoro) は、古式によれば、人名には尊敬の助辞を添へないけれども、新式ではSama (様)、Sonxi (尊師)、Sonrō (尊老)、Rō (老)、Cō (公) を用ゐてよい。

[中略]

○ 一層敬意を強めようと思ふ場合に、助辞のXinjō (進上)、Fajjō (拝上)、Faitei (拝呈)、Faifucu (拝覆)、Quinjō (謹上) を人名に添へ得ることは、その条で既に述べた通りである。

(同上「宗教家及び聖職者の書状で使ふべき礼法に就て」訳本p.716)

末尾の「誠惶誠恐敬って申す」は、非常に敬意が高い表現とされ、高位聖職者に対する書簡で用いるのに相応しいとされている。

○ 書状の末尾で使われる特定の敬語があり、それは相手の官職に応じて使われるのであるが、たとひ下僕であっても書かれる。[中略]

1. Xeiquō, xeiqiuū vyamate mōsu. (誠惶、誠恐敬って白す。)

Mairu fitobito von naca. (参る人々御中。)

2. [中略]

○ 更に一層注意すべき事は、Xeiquō (誠惶)、Xeiqiuū (誠恐) は最高の敬語であり、又敬語は上書の‘側書’ (Sobagaqui) と関聯があるので、互に調和してゐなければならないといふ事である。即ち、Quiūquō (恐惶) にはFitobito vonnaca (人々御中) が、Quiūqiuū tçuxxinde mōsu (恐々謹しんで言す) にはGoxucuxo (御宿所) が相応するのである。

(同上「書簡の末端に於ける敬語と礼法に就いて」訳本p.700)

書状の終に於けるものは既に述べたところであるが、その人の如何によって次のやうな敬語が使われるであらう。即ち、

Xeiquō xeiqiuū vyamate mōsu. (誠惶誠恐敬って白す)。 Xeiquō xeiqiuū tçuxxinde mōsu. (誠惶誠恐謹しんで言す)。

(1) 訳文は、土井忠生訳注『日本大文典』(三省堂1955)による。

Quiũquõ tçuxxinde mõsu (恐惶謹しんで言す)。Quiũquiũ tçuxxinde mõsu (恐々謹しんで言す)。

(同上「宗教家及び聖職者の書状で使ふべき礼法に就て」訳本p.716)

なお、本資料では「誠恐」をxeiqiõと表記しているが、『日本大文典』や『日葡辞書』では「xeiquiũ」と表記している。当時の日本の資料には「誠恐」(易林本節用集)とふりがながあり、これをローマ字表記に直せば「xeiqiõ」または「xeiqeõ」となる。本資料のXeiquõ xeiqióというローマ字表記は、日本の古辞書類の仮名表記に準じたものである。

また、「尊意を得べく候」(76r-10-11)も、典型的な結びの一つとして『日本大文典』に例示がある。

書面を終るのに普通使はれる成句は次に挙げたものや其の他似たやうなものである。

Nauo mempaino toqiuo goxi soro. (猶面拝の時を期し候。)

[中略]

Sonyuo vbequ soro. (尊意を得べく候。)

Quiy vbequ soro. (貴意得べく候。)

[後略]

(同上「書状の結尾」p.699)

以上の例から、本資料は日本の典型的な書簡の作法に則って書かれたものであるということが分かる。

5. 表記

5.1. 全体的な特徴

本資料のローマ字表記は、基本的にキリシタン版のローマ字表記とほぼ同様である。キの表記はqi、ケの表記はqeで統一されている。

ツの表記は、キリシタン版と同じtçuの他に、cに補助記号セディーリャが付いていないtcuの表記も使われている。

5.2. 母音

母音はキリシタン版と同様にア=a、イ=i, y、ウ=u, v、エ=e, ye、オ=o, voと表記されている。

アクセント記号は、版本と同じ開合記号と、アセント・アグード (´) が使われている。開合記号が付されているオ段長音には、開合の混乱は見られない。アセント・アグードが使われている語は、catçúua (76r-06)、dancó (76r-07)、aycanóni (76r-08)、gomenqio tóno (76r-09)、nijú (76r-12) の5語である。アセント・アグードは写本類では、長音記号としてだけでなく、ティルダ (˜) と同様に鼻音を示す場合もあるが、本資料では長音を示していると考えられる。

5.3. 子音

子音も、キリシタン版とほぼ同様の表記法を採っており、四つがなの区別や入声音-tの表記もなされている。

5.3.1 ザ行子音

ザ行の表記の特徴として、版本ではjiと表記するジをijと表記する例が非常に多い（ジ5例中、ji表記1例、ij表記4例）ことである。

キリシタン資料では、ijという表記は母音のiが重なる場合の表記とするのが一般的であるが、ここではii（イイ）ではなくji（ジ）と同じものとして使用している。本資料ではiacunen（「若年」76r-06）でもジャの子音をjではなくiで表記しており、本資料では母音の前のiとjを同等に子音として扱っていると言える。

5.3.2 ク=cu, qu

クに相当する表記は、cuが9例、quが3例である。クの表記について、『日本語小文典』（1620刊）ではkuを動詞の活用語尾にのみ使うよう提唱されているが、『日葡辞書』では特に動詞の活用語尾にquを使っており、バレット写本（1591写）や1617年のポーロ報告書内の殉教証言書（*Jap. Sin.* 17, 317r-318v）では活用語尾にqu、それ以外にはcuを使うという使い分けの傾向がある。⁽¹⁾

本資料では、quが使われているのは、cataijqenaqu（「忝なく」76r-04）、vonajiqu（「同じく」76r-09）、vbequ（「得べく」76r-11）の3例で、すべて活用語の活用語尾である。

一方、cuが使われているのは、vatacuxi narazutoua（「私ならずとは」76r-03）、iacunen（「若年」76r-06）、cuuatate（「企て」76r-08）、mexi cuuayerare（「召し加へられ」76r-08）、cudasaru beqi（「下さるべき」76r-10）、manzocu（「満足」76r-10）、roppiacu（「六百」76r-11）、cunen（「九年」76r-12）、Cuguat（「九月」76r-12）の9例で、活用語尾に使われている例はない。

用例数があまり多くはないものの、本資料では、quは活用語尾に使いcuはそれ以外に使うという、クのローマ字表記の使い分けがなされていると言える。

6. おわりに

本資料のローマ字表記は、キリシタン版の規範にほぼ則った表記であり、ジをijと表記するのが特異ではあるが、それ以外には手稿資料独特の表記といったものは見受けられない。本資料の筆者は、イエズス会のキリシタン版の表記規範をよく学習し、身につけていたのである。また、日本の書簡における作法もよく踏まえており、きちんとした教養を身につけていた人物であることが伺える。

前述したように、本資料は書簡の原本ではなく写しであろうと推定されるため、書簡文の作成者と本資料の筆者は別人である可能性が高い。ただし、本資料の筆跡が非常に丁寧であることを考慮に入れると、写しであったとしても、原本の表記を忠実に転写した可能性も否定できない。

セミナリヨの一生徒がイエズス会総長への書簡を作成するとは考えにくく、この書簡文の作成者および筆者は、有馬セミナリヨの聖母のコングレガシオを代表する立場にあった人物ではなかろうか。

(1) 森田武『日葡辞書提要』（清文堂1993）、拙稿「イエズス会ローマ文書館所蔵1617年ポーロ報告書内殉教証言書の日本語表記」『長崎大学教育学部紀要 人文科学』第72号（2006年3月）参照。

付 記

本稿は平成18年度科学研究費補助金（若手研究（B））（課題番号：17720102）による研究成果の一部である。